『まんじ』99号(2006.2)

地に堕ちた韓国の偶像

新井　宏

先般の韓国滞在中（平成十七年十一月二十日から十二月七日）、最大のトピックスはソウル大の黄禹錫教授のＥＳ細胞疑惑であった。

なにしろ人クローン胚からＥＳ細胞を作り出すのに世界で初めて成功し、いまや国民的な英雄で、もう既にノーベル賞を受賞したかのように取り扱われ、国家からも莫大な研究費が与えられ、韓国の未来は生命科学にあると持てはやされてきた人物である。その黄教授の研究に疑惑が満ちているというのだから大騒ぎである。

ことの発端は民間テレビ局ＭＢＣ「ＰＤ手帳」による二十二日付け報道であった。黄教授チームの研究に用いられた卵子が、女性研究員から強制的に提供されたものや売買によるものあったという生命倫理上の告発である。

もちろん黄教授側はこれを強く否認し、韓国世論はこれを認めようとした。しかし生命倫理を振りかざす国際世論の前には早期の収拾が必要であった。二日後の二十四日には一転して黄教授は事実関係を認め国民に謝罪し、一切の公職から退くことを表明した。

ここからが韓国らしい反応である。翌二十五日にはＭＢＣ「ＦＤ手帳」のスポンサー十二社の内、十一社が放送に抗議し降板を表明する。これに呼応してＭＢＣに対する抗議デモが起り、不視聴運動がはじまる。

ＭＢＣというテレビ局は有力民放ではあるが、低視聴率に喘いでいた。だからこの反応に経営陣が震え上がる。

しかし現場は既に走っていた。「ＰＤ手帳」はサイエンスに発表された黄教授チームの論文自体に疑惑があることを次回に放送すると予告する。本来なら一致すべき患者のＤＮＡとＥＳ細胞のＤＮＡが一致しない上に、黄教授チーム員からも重大証言を得ているというので

ある。

ここで韓国世論は国民的な英雄、黄教授の擁護のために大合唱を始め、情報提供者を国家犯罪人であるかのように難詰する。その結果、重大証言者と目される金研究員は「強圧下の取材」だとその内容を否定してしまう。これを伝えたのがＭＢＣのライバル局でニュース専門のＹＴＮだったので、ＭＢＣはますます窮地に追い込まれる。もっとも、この報道も後に黄教授の指示によって仕組まれたことが発覚するのだが。

ＭＢＣの経営陣はもはや猶予できなかった。十二月四日には「人権侵害取材」について社告で大々的に国民に謝罪し、「ＰＤ手帳」の主担当を無期待機とし、放送そのものを中止してしまう。

この頃の韓国世論は、疑惑があるなら検証すれば良いと考える者は三十パーセントに過ぎず、疑惑などで騒ぎ立てずに、韓国の名誉を維持しようというのが大多数で、与党も各野党もこぞって世論に迎合した。政府も公式見解として「消耗的な議論の中断を促す」とし、盧武鉉大統領も「研究を引き続き支援する」と懸命に幕引きを図る。ここに政治がでてくるのが韓国らしいところである。

だから韓国の国民は放送中止によって、ほっとしたに違いない。しかしこれが世間知らずの韓国人らしいところである。これで済むはずがなかった。

結局この時、韓国の国民は最悪の選択をしてしまった。黄教授たちの個人犯罪を国家の共犯に格上げしてしまったのである。

おそらく「ＰＤ手帳」の関係者によるリークであろう。重大証言の内容が克明に流れはじめる。もはや止められない。卵子事件で既に共同研究者からの離脱を表明していた米国ピッツバーク大シャッテン教授に続き、十五日には責任ある共同研究者の地位にある盧聖一ミズメディ病院理事長が、十一件の実施例の内、九件は水増しであり、残りの二件さえも疑惑が残ると発表したのである。

それまで一貫して疑惑を強く否定していた盧理事長の発言は、瞬く間に世界中に報道される。捏造疑惑に関してはもうこれで完全に勝負がついてしまった。ＭＢＣもその夜おそく急遽「ＰＤ手帳」を放送する。

そればかりではない。韓国の国民は、二件だけでも正しければ、世界的な業績ではないかと主張したかったであろうが、百八十五件の実施例の内、一、二件の成功では臨床学的な意味がなく、論文の価値が全くなくなってしまう。なぜなら、それは既に二〇〇四年にサイエンスに発表済みのことだからである。しかも盧理事長によれば、提供した卵子は総計千二百個にも及ぶというのであるからなにをかいわんやである。

こうなると疑惑はとどまるところを知らない。その二〇〇四年の論文さえも、疑惑まみれだというのである。良く見ればその証拠写真として掲載されたものが、その前年のステム・セルという学術誌に他の発表者名で発表された写真と同一だというではないか。英誌ネイチャーの犬のクローン複製についての論文も疑惑があるという。

その他にも、疑惑検証のために提供すべきＥＳ細胞が五件もカビの感染で使えないのは、国家プロジェクト水準の環境ではありえないとか、黄教授が製薬開発会社の株主だったとか、毎日のように暴露が続く。

かくしてＥＳ細胞疑惑は既に韓国の今年の最大ニュースに決定してしまった。韓国の偶像は地に堕ち、韓国の国民全員がうつ病にかかってしまった。

韓国の大学にいると研究現場で何が起こっているか良く判る。それは日本でも起きつつある問題でもあるが、大きな違いは変化のスピードである。歴史の浅い韓国大学の研究現場に対し、慌しく「役に立つ研究」を導入したことで、ひどい混乱状況を招来してしまったのである。

研究開発と一言でいうが、研究と開発ほど性格の異なるものはない。

研究は好奇心がベースで一番重要なことは独創性である。新規性のない論文など何の意味もない世界である。だから遊びの精神を必要とし、一直線に進展することとは最も縁遠い分野である。

しかし開発は異なる。機能的にもコスト的にも時間的にも目標があり、既存の技術や知識を総動員して、システム的に最短距離をつっ走らなければならない。大学のもっとも不得意とするところである。

ところが「役に立つ研究」という言葉がいったん発せられると、それを「開発」と理解してしまうのが大勢である。しかも政府が「役に立つ研究」に重点配分するあおりで、一般の研究費をかえって絞ってしまうと、猫も杓子も「開発」をテーマにして予算を申請する。

ここに大きな問題が生ずる。夢を描いた開発テーマといえば格好が良いが、詐欺的なテーマで、とにかく予算獲得してしまおうとする動きが起こる。韓国の社会や機構は、まだそれを充分に防止できるほど成熟していないので、まじめに研究申請する者が損をする。

文官優位の構造がはびこる韓国では、荒唐無稽のテーマでさえまともに評価しえない。もちろん大真面目なテーマもあるが、先進国の実状をちょっと調べれば、大学の研究室などの手に負えるものでないことなどすぐ判るのに、これが通ってしまう。

しかし、このような非現実的なテーマでは、成果が上がるはずがない。しかも、これをスピード感もコスト意

識もない教育現場でやるのだから、すぐさま行き詰まってしまう。見込みが無ければ即刻中止するのが開発であるが、それも出来ない。研究費の大半が飲み食いや大学院生の生活費に費やされ、あとはガラクタ化する開発ミニチュア機械が残るだけの惨状となってしまうのである。

そこで多少先の見える教授たちは論文書きに精を出す。そうでもしないと次回の予算は絶望的になるからである。しかし開発を意識した実験と研究的な実験では質が異なる。大学院生たちは継ぎはぎだらけのデータで低水準の論文を書かざるを得なくなる。

それも韓国の学会誌は相手にできず、商業的な国際英文ジャーナルに投稿しなければならない。さもないと得点にならない評価システムがあるからであるが、そこでも二重投稿はもとより分割や再組み合わせによって異なる論文を装う水増しが常套的に行われる。論文共著者も名義の貸し借りで、黄教授の論文のように二十名以上に達することも稀ではない。得点稼ぎをしなければ生きて行けない仕組みなのである。研究分野でこれほど腐敗の温床を完備している国もないと皮肉ってみたくもなる。

状況は日本でも似ているが、それでも日本は従来の伝統が根付いていて、暴走に歯止めをかけている。しかし韓国では壮大な浪費が進み、真の研究水準を高めるために資金が回っていない。そのため優秀な学生は韓国の大学院を相手にせず、外国へ外国へと流れ出る。

だから韓国の大学研究を見ていると、黄教授のＥＳ細胞疑惑などまったく例外的なこととは思えない。野心的な先陣争いにルール違反があることなどむしろ当然のことだと映るのである。成果が上がり、韓国の国民が熱狂すればするほど、それに応えるためにむしろルール違反が加速する構造なのである。

意外なことであるが、バイオや生命科学など先端研究分野ほど若手研究者は劣悪な環境に置かれている。研究志望者が多い反面、成果がでるのは、はるかに先の話だからである。救いは国からの支援である。これに成功したのが黄教授である。手品をして見せては、資金を得て、研究員を抱え込む。そして業績を積み重ねる。要するに、研究を宣伝する術に長け、研究予算をガッポリ取ってきて、研究員という兵士を多数雇ったところが有利な労働集約型の分野なのである。テレビに現れる黄教授の研究室が、あたかも養鶏場のようであり、せまい場所に顕微鏡を覗く研究員が犇いているのを見ると頷けるであろう。まさに研究ではなく開発なのである。

だから、その自転車操業に打ち勝たねば研究は続けられない。いわば中小企業の社長の資金繰りであり、ＥＳ細胞のサイエンス論文の一番乗りは、でっち上げてもぜ

ひ達成せねばならない経営目標だった。多少のごまかしなど眼中になかったのが実状だろう。その結果、韓国政府は世界のＥＳ細胞バンク「世界幹細胞ハブ」を韓国に立ち上げることに成功し、その所長に黄教授を就任させる。国民はノーベル賞を超える業績だと熱狂した。

だから、もともと韓国国民と黄教授チームは共犯関係にあったとも言える。それは韓国政府が人クローン胚に関する倫理問題を軽視して規制を緩和し研究を走らせたからである。

話題のＥＳ細胞とは、未受精卵の核を抜き、そこに患者の皮膚細胞の核を入れて、いわゆるクローン胚を経て作った細胞で、多細胞に分化する能力があるため、患者に必要な臓器の細胞を拒絶反応なしに作りだすことができる。ただしこのクローン胚は、胎盤に入れればクローン人間の誕生につながる。そのため、キリスト教国を中心として厳しい研究の制限が設けられいる。日本も例外ではない。

したがって、黄教授の研究成果が報道された時、全世界の研究者の反応はやっかみの感情を持った賞賛であり、韓国の国民が絶賛するほどではなかった。ノーベル賞以上と言うよりは底流には倫理面の疑惑があり、その問題がある限り当面ノーベル賞とは無縁のものであった。

しかし韓国は国家の威信にかけてノーベル賞を必要としていた。金大中元大統領が平和賞を受賞してはいるが、これも北朝鮮との金銭疑惑まみれのものであり、科学分野でのノーベル賞は国家政策の中心課題とさえなっていた。おそらくノーベル賞を政策課題とした国など韓国以外にはないであろう。それほどまでに渇望していたノーベル賞なので、これに水をかけたＭＢＣ「ＰＤ手帳」を韓国の国民は許すことが出来なかったのである。

ＭＢＣはどこに行くのであろうか。本来ならば韓国のジャーナリズムの健全さを証明し気をはいたはずのＭＢＣなのに、世論の前に屈してしまい、醜態をさらした。もっともＭＢＣは捏造報道の常習犯で、日本関連の七三一部隊の特集でも社告を出して捏造をわびている。ＥＳ疑惑報道もその次元で捉えられたところに、韓国の未成熟さがある。

一方のＭＢＣ批判の先頭に立ったＹＴＮも大きく傷ついた。黄教授の仕組んだ「人権侵害取材」にまんまと乗ってしまった。新聞も同罪でジャーナリズムの健全さを示す機会を失った。政府も政党も学界も全てが傷ついた。かくして黄教授チームの個人的な論文捏造が、国家犯罪に格上げされてしまったのである。その結果、韓国国民が全員うつ病に罹ったと揶揄される始末で十二月十五日を韓国科学界の国恥の日とする発想もその延長線にある。

しかし韓国もこんどのことで学ぶであろう。小さな隠蔽が大きな自動車会社を破綻に追い込むこともあるということを。内輪で庇い合う論理が国際的には通用しないことを。そして、国連の北朝鮮人権侵害決議にどうしても加わらない韓国も、ここで内輪の論理を捨てなければならないということを。

もっとも、米国のピッツバーグ大ソル・デウ教授は「韓国科学界の国恥の日ではなく、むしろ祝祭日」とすべきだと述べている。韓国の自浄作用を称えた形をとってはいるが、この皮肉が韓国にはたしてどこまで通じるであろうか。